

# 大学教育におけるファシリテーション

—動画制作によるアクティブラーニング型授業の試み—

Facilitation in Education at University:

A Case of Active Learning through Introductory Film Making on Campus

佐藤 壮広 空閑 厚樹

SATO, Takehiro KUGA, Atsuki

## Abstract

In this paper, the authors discuss facilitation through making short video films on campus at the university. The authors introduce an experiment conducted in a class at Rikkyo University in which they joined a film workshop. The participants were the students regularly enrolled in the class. The facilitators conducted a workshop focusing on making films that show several places, including locations with sentimental value, related to the participants' personal campus lives. The facilitators guided the students to help them notice the importance of the value of living "in the here and now." By taking part in different film activities, the students practiced four skills. First, they could observe clearly the broad scale of their ordinary lives and the spaces of their daily activities. Second, they could understand the importance of communication skills in team activities. Third, they studied how to make impressive films. Fourth, the processes of reflection and analysis of everything around them constitute the basic procedures for redefining their campus lives. As a result, the self-evaluation surveys of the participants showed that through the workshops they experienced during the classes, they were able to deepen and expand their horizons and perspectives on life and the environment around them.

**Key words:** campus life, place, sentimental value, "here and now", facilitation, design of learning

## 問題の所在

筆者（佐藤）は、2012年度から立教大学コミュニティ福祉学部で「コミュニティと文化／文化政策」という授業を担当している。また、当学部教員の河東仁、および本稿共著者である空閑厚樹と「コミュニティ・ファシリテーション研究会」を組織し、定期的に研究会を開いている。

筆者の担当する「コミュニティと文化／文化政策」の受講生の人数は毎年100人前後だが、新座キャンパスについての次のような評を、彼らからたびたび聞いてきた。「立教大学といえば池袋キャンパスがメインで、テレビにはそっちばかりが取りあげられる」、「イケキャン（＝「立教大学池袋キャンパス」の略称）に比べ、ザキャン（「立教大学新座キャンパス」の略称）は地味だし、インスタ映えするところが少ない」、「敷地は広くてゆったりしているけれど、都心からは離れているから広いのは当たり前。新座キャンパスの良いところは、それぐらい」等々。

当科目では、コミュニティ形成と活性化のためにどのようなプランや政策のアイデアが必要かという点について、理論と実例をもとに講義している。さらに2015年度からは、「足もとの価値、いま・ここの価値」を掘り起こすことを学修目標の軸に据え、授業を行なっている。理由は、先に紹介した学生たちの言葉を聞き、まず現在のキャンパスの価値を把握することが、学生たちの実存的課題としても、またコミュニティを再考するという点でも重要な作業だと考えたからである<sup>(1)</sup>。具体的には、教室をひとつのコミュニティと見立て、〈出会いー共に過ごしー協同で作業をする〉という人間社会の基本的営みを体験するというデザインで授業を組み立てた。

本稿では、「いま・ここの価値」の掘り起こしや捉え直しの重要性を、場所論やコミュニティ論の知見を補助線にしつつ論じ、続いて筆者が実践している授業内でのワーク、「新座キャンパス紹介動画作成」のプロセスを事例として紹介し、このワークの教育的効果と意義について考察する。

## 1. キャンパスの価値を掘り起こすための理論的補助線 —— 場所、価値、コミュニティ

### 1-1. キャンパスを居場所とするには

「四角いハコ」。筆者は、大学やその他の多くの「教室」と呼ばれる場所を意味づける際、この言葉を使う。黒板、ホワイトボードがあり、邪魔にならない色合いの机と椅子があり、昔から変らぬ蛍光灯（最近はLED灯）が天井についており、AV機器の操作パネルが備えつけてある。90～100分間近くこの空間で過ごすには、話し手にも聞き手にも、相当のリズムと展開と集中力を保つ工夫が要求される。学生も教員も週に10コマ前後、この「四角いハコ」で過ごす。そこにはN313、N311などの整理番号（教室番号）があてられている。学期のはじめには、授業教室一覧表を参照しながら教員も学生もそのハコへと集まる。

このように、各教室は建造物の中に仕切り分けられたコンパートメントであり、物理的な場所としてはそれ以上でもそれ以下でもない。にもかかわらず、われわれの多くは自分が通った「学校の教室」という場所に、何がしかの感情を抱き、そこに貼り付いている記憶のいくつかに懐かしさを覚えることがある。6・3・3・4年間という日本の教育制度の中では、大学を卒業するまで

に、われわれは計16年間も教室という場所で学ぶ時を過ごすことになっている。教室はまさに、われわれが自分を形成する主要な現場なのである。大学のキャンパスも、学生および教職員にとっては日々自己を形成・更新する現場であり、同時にその意味が問いなおされる現場である。

ところが、大学やほかの教育機関は、学びを提供する機能的空間であることを重視する傾向が強く、そこで過ごす人々がキャンパスや学びの空間全体の価値や魅力を味わう機会は少ないと言わざるをえない。数年から十年近くキャンパスに通っていても、足を運んだことのない建物や教室はたくさんある。別な言い方をすれば、そこは「知らない場所」であり、他所（よそ）と言ってもいいような、関心のない場所である。そのような場所に分け入って、場所の価値を再発見するという冒険やワークショップを開けば、学生や教職員によるキャンパスの見え方もダイナミックに変化するに違いない。ただ、そのような事をする機会も余裕も、現在のキャンパスには無い。そうした現状をふまえ、担当授業を通してそのような作業を試みることで、少しでも以上に述べたようなキャンパスの意味づけを豊かにすることに資すればと考えたわけである。

## 1-2. 場所

現象学の方法によって人文地理学に新しい領野を拓いたエドワード・レルフは、『場所の現象学』の序文で次のように述べている。

私は近年の環境問題に関する論議の多くについて不満と不安を感じている。なぜ不満かという、人間行動や個々の問題に関する分析が機械的で抽象的であることが多く、日常経験のきめ細かさや意義の多くを見落として、安易な構造やモデルに単純化しているからである。(中略) 本書の焦点は抽象的なモデルや理論にあるのではなく、「生きられた世界」、つまり日々の営みのなかで、私たちが暮らし、知識を得、直接に経験する背景や状況にある。とくに本書は、生きられた世界のひとつの現象である「場所」について考察しようとするものであり、私たちの場所経験の多様さと濃密さを明らかにしようとするものである。(レルフ1975=1999: 18-19)

上記に端的に述べられた場所に関するレルフのアプローチは、本稿での論点に引きつけて考えるならば、足もとにある新座キャンパスを学生たち自身が「生きられた世界」、つまり「場所」として再発見し、その魅力をそこで日々の営みのなかから掘り起こすことの大きな意義を示唆している。本稿の主題に関わる範囲で、いまだレルフの場所論のポイントを拾い上げてみよう。レルフは、「個人や人間集団の安全性やアイデンティティの源泉」(レルフ1999: 37)として場所を意味づけており、「意義ある場所を経験し創造し守っていくための手段を見失わないようにすることが重要である」(レルフ1999: 37)と述べる。ここで指摘されている「手段」を、筆者は授業内に実施する種々の「いま・ここの価値」を掘り起こすワークとして解釈し、実際に試みているのである。

レルフは続けて言う。「こうした手段がいまや失われつつあり、特徴のある多様な経験と場所

のアイデンティティの弱体化、すなわち「没場所性」が優勢になっているというたくさんの兆候がある」(レルフ 1975=1999:37-38) と。この「没場所性」とは、現代の景観に対するレルフの根本的批判を示すキーワードである。別の箇所では、「どの場所も外見ばかりか雰囲気までも同じようになってしまい、場所のアイデンティティが、どれも同じようなあたりさわりのない経験しか与えなくなってしまうほどまでに弱められてしまうこと」(レルフ 1975=1999:208) だと述べている。このレルフの言葉は、目下、同じような建築設計によって、同じような建設業者による、同じような質感のビルディングが建つ、昨今の多くの大学キャンパスの状況についてのコメントとしても、読み替えることができる。

以上の観点からも、キャンパスの「いま・ここの価値」を掘り起こす作業は大きな意義があり、それは「生きられた世界」としてのキャンパスライフを創り出すことでもあり、本稿は考えるのである。では、その「いま・ここの価値」とは何なのか。どのようにその価値の内実を考えればよいのか。次節ではその手がかりとして、「センチメンタル価値 sentimental value」という考え方を紹介したい。

### 1-3. 価値

地域経済論、まちづくり論を専門とする足立基浩は、英国・ロンドンでの地域経済研究と和歌山市や岸和田市などにおける地域活性化事業の成果をふまえ、「センチメンタル価値を重視したまちづくり」(足立 2009:v) という新しい概念を提示した<sup>(2)</sup>。足立によれば、この「センチメンタル価値」は「市民が持つ街に対する愛着」(足立 2009:v) だという。それぞれの町には愛着あるスポットが必ずあるはずだが、衰退した多くの都市ではそうした魅力的な場所が放置されたままになっているというのである。足立はここで、衰退した都市と言いながらも、そこにもなお魅力ある場所が眠っていることを示唆している。そして、続けて次のように述べる。

センチメンタル価値を重視したまちづくりとは、そういったスポットを市民が再発見し、磨き、まさに光に育てることである(足立 2009:v)。

地域経済を専門とする足立は、価格としての把握は不可能だが「便益」としての効用を把握できる価値のひとつとして「非利用価値」をあげ、それを「心理的価値」と言い換える。足立が強調するのは、この価値すなわち「センチメンタル価値(愛着価値)」である。さらに足立はこのセンチメンタル価値とは、「長年の親しみが生み出す建物に対する愛着の価値や街のシンボルとしての価値」(足立 2009:v) だと述べる。これを本稿の趣旨に引き寄せて述べるならば、「長年の親しみが生み出すキャンパス内の建物に対する愛着の価値や、キャンパスのシンボルとしての価値」と表現することができよう。

まちづくりにおけるセンチメンタル価値を掘り起こすことと、キャンパスにおける「いま・ここの価値」を掘り起こすワークは、前節の「生きられた世界」としての「場所」を再構築する営

みと地続きだと考えることができる。足立は「思い出の価値はいくらか」という興味深い論考で、センチメンタル価値をまちの「個性の価値」として計測し、ふるさと納税や地域への寄付金などがその価値指標のひとつだと指摘している（足立 2009:121-154）。そこで、学生にとってのキャンパスの価値はどのように計測できるのかという問いが出てくる。具体的な金額を割り出してその価値を測ることは難しいが、授業を通した学びの中で、これまで認識できなかった“新しい”価値をどれだけ発見できたか否かが、学びの内容を評価するひとつの尺度にはなる。この点に関しては、授業のまとめの時間に学びの自己評価シート（後述）を用いて学生たちの声を拾い上げた。立教大学新座キャンパスの学生たちにとっての「センチメンタル・スポット」、愛着ある場所探しをする授業デザインは、このような背景で組み上がっていったものである。

ところで、こうした試みを行なってきた担当科目「コミュニティと文化／文化政策」におけるキーワードは、言うまでもなく「コミュニティ」である。教室をひとつのコミュニティと見立て、授業内に相互交流し、時を一緒に過ごし、協同作業を行なうことを旨としている授業で、「コミュニティ」をどのように定義づけ、授業を構成するブロックのひとつにしてきたか、次節で説明することにした。

#### 1-4. コミュニティ

「コミュニティ」とは、米国の社会学者R・M・マッキーヴァーが提起した用語で、地縁・血縁などにもとづいて形成される集団を指す、本来は非常に多義的な概念である。マッキーヴァー（マッキーヴァー 1917=2011）は、利害関係によって組織される「アソシエーション（機能社会）」と対置させ、コミュニティという言葉を用いた。現在では、村落、地方、都市といった地域で形づくられる共同体を指す語として広く用いられている<sup>(3)</sup>。

また昨今、大学を取り囲むエリアを学びの場、あるいは学知を還元する場として位置づけるようになってきており、その周辺エリアをあらためて「地域社会」「地域コミュニティ」などと呼び、地域連携を含む学び、地域に貢献できる学び、コミュニティにおける学び、サービス・ラーニングといった試みも行なわれている。いまやコミュニティは、地域の人びとが暮らす一定の範囲とその営みの総体を含意するものとなっている。また、教育学や教育の現場では、共に学ぶという目標や活動を「共有」している場をコミュニティと定義し直し、その場は「創発的な学びの基盤」として意味づけられてもいる（美馬 2005:201-210）。

本稿では、「教室をコミュニティと見立てる」ことに立脚した授業デザインを扱っているが、この場合のコミュニティとは、単位修得という目的で履修した機能的共同体という含意と、立教大学コミュニティ福祉学部という学びの縁（「学縁」と名付けたい）で参加した共同体という、ふたつの含意をもつ集団を指す。また、校門を入った内側に広がるキャンパス空間をひとつの村落あるいは都市とみれば、キャンパス自体がひとつのコミュニティとしての顔をもつことも、あらためて見えてくる。

ところで、場所としてのキャンパスについて述べた1-2の議論にも関わるが、キャンパスを

学びの空間として活用する際には、その空間特性についても一考する必要がある。大学の環境が学生にとってどのような性質の空間となっているかを調査・分析した前田明洋（(株)岡村製作所オフィス研究所パブリック研究室室長）は、ある私立大学の理系研究室に所属する学生を対象にした調査で、「知的活動には多様な空間が必要である」との調査結果を報告している。それによれば、研究場所として最も多く選ばれた空間は「研究室の自席」、続いて「自宅」という結果だったという。これらの場所は、リラックスでき、質問でき、静であり、作業がしやすく、調べものもしやすく、集中できる場所として、ほかの場所よりも好んで選ばれているのだという。前田は、「知的に活動を伴う作業は、個人によって好む空間にばらつきがあるので、一様な空間を提供するのではなく、様々なパターンの空間を設けておく必要があることが分かりました」（前田2013:40）と結論を述べている。このことから、学びのコミュニティとしての立教大学新座キャンパスに、様々なパターンの空間が設けられているか、あるいは学生がキャンパス内に様々なパターンの空間を見出しているかが、コミュニティとしての質を測るポイントとなってくる。以上が学びの場、学びの空間環境としてのキャンパスを考える論点として挙げられよう。

立教大学では、協同学習を支援する空間としてキャンパスの各所にラーニング・コモンズを設置している。新座キャンパスの図書館では、「グループ学習スペース『しおり』」を設置している。池袋キャンパスには、池袋図書館「ラーニング・スクウェア」「グループ学習室」、メーザラブラリー記念館「メーザー・ラーニング・コモンズ」なども設置され、学生たちが活用している<sup>(4)</sup>。

本章では、キャンパスの「いま・ここの価値」を掘り起こすための補助線として、場所、価値、コミュニティという3つの概念を手がかりとし、考察してきた。次章では、これらの概念が授業の中でどのように学びのポイントとして意味を持ち、学生たちが授業内ワークを通してそれらをどのように理解したかという点について述べる。

## II. 動画作成ワークと「いま・ここの価値」の掘り起こし

II章では、まず「文化政策／文化とコミュニティ」の授業デザインについて述べ、どのような過程と作業を経て、仕上げとしての動画作成ワークと作品講評、学びの評価を行なったのかを紹介する。

### II-1. 授業のデザインとプロセス

2018年度の「文化政策／文化とコミュニティ」の履修者は2年～4年生までの153名で、授業は200名収容の階段教室（新座キャンパスN311）で行なった。シラバスに明記した授業の目標は、「コミュニティの生成・維持・発展を促す政策のプランと実施において、「文化」が果たす役割を学び、それをもとにしてコミュニティ政策の現場に応用できるアイデアを創出する」である。授業の内容説明は、次の通りである。「授業の場もひとつのコミュニティであることをふまえ、講義の中で次の1～5のアクションを実施する。1-出会い、2-親密さの育成、3-相互理解、4-プロ



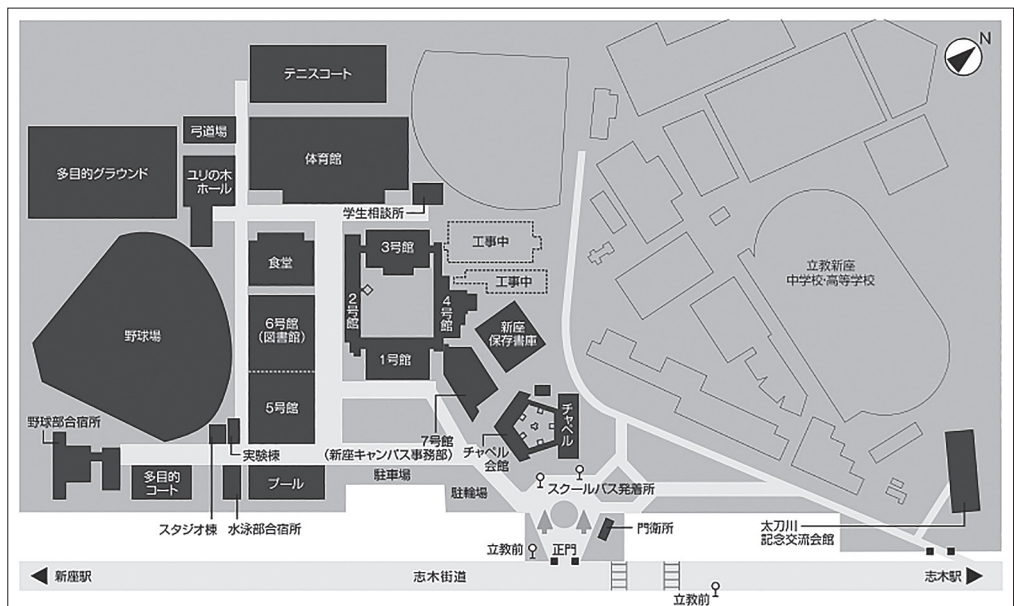
ジェクトの計画と実施、5-振り返り。「文化」(集団が共有する思考と行動の様式、またそれが表現されたシンボル等)に焦点をあて、それがコミュニティ政策に果たす機能について理解を深める」。

全14回のうち、1-3回は文化とコミュニティに関する講義にあて、4-6回はチームづくり・場づくりのためのワーク、7-9回はキャンパスの「いま・ここ」の価値を可視化するワーク、10-14回ではキャンパスの紹介動画作成と振り返り(編成会議、取材・ロケハンティング、試作版の検討、完成版の提出、相互鑑賞・講評)を行なった。

4-6回のチームづくりの際には、自己紹介シートの発表と、他己紹介(簡単な相互インタビュー)を課題として取り組んでもらい、クラスの成員の交流を促した。その上で7回には、「センチメンタル・スポット」としての「キャンパスおすすめスポット」の洗い出しを、クラス全体で行なった。作業は、新座キャンパスの拡大地図を黒板に貼り、その地図の上のスポットに各人の名前と場所名を記入した付箋を貼っていった(図1,2参照)。付箋を貼ることによって、まずは自分たちがキャンパスのどのエリアで学生生活を営み、キャンパスがどのように活用されているかを可視化することができた。併せて、その場所を選んだ理由もリアクションペーパーに記入して提出してもらい、授業内でそれらを共有した。

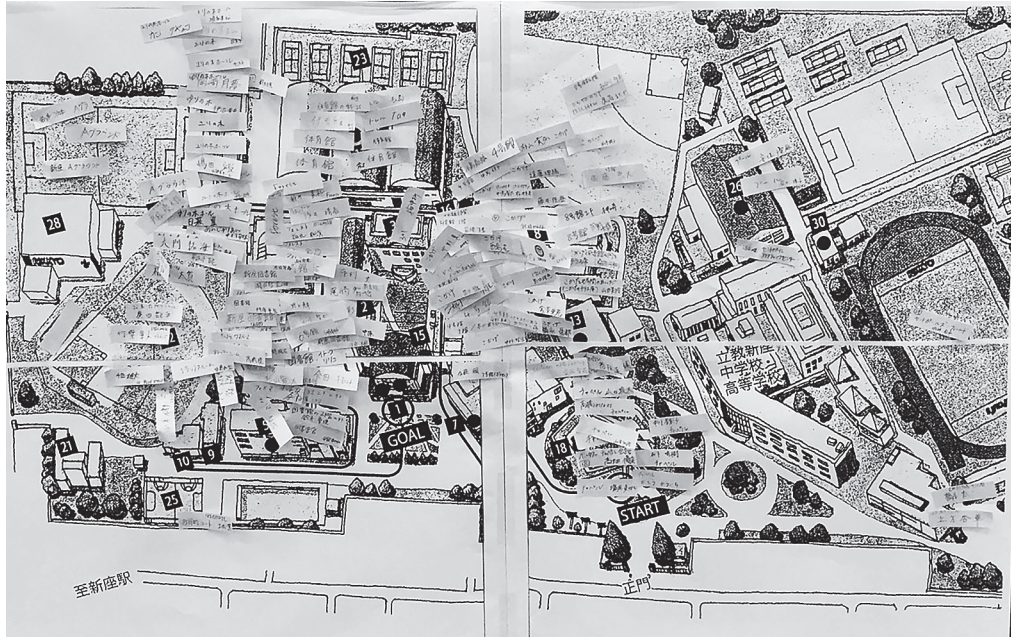
続いて、同じエリアを選んだ学生ら4~6人で班を作り、その場所を選んだ理由をじっくり語り合う時間をとった(8-9回)。それから編成会議を経て、試作版の作成に入った。動画作成には、スマートフォンで利用できる動画作成アプリ、iMovie(アイムービー)やClips(クリップ

図1 立教大学新座キャンパス地図



(参照 <http://www.rikkyo.ac.jp/tourism/news/pdf/20180918.pdf>)

図2 付箋をつけた新座キャンパス地図



ス)などを指示し、動画の保存フォームをmp4、WMVまたはMOV形式に指定した。これは、まとめてファイルを鑑賞する際に形式がある程度統一されているほうが扱いやすく、整理も簡便になるためである。

編成会議のあと試作版をチェックし、立教大学関係者以外にもきちんとその場所の魅力が伝わる仕上がりになっているかを相互に確認し合う作業を行なった。完成版は12月中旬に提出、そして鑑賞・講評、作業の振り返りも行なった。鑑賞の際には、チェックすべき7項目を明記した相互鑑賞シート(表1)を配布し記入した。また、最終の14回には、授業の目的・内容に照らし、学生自身の学びを振り返るために作成した「到達度自己評価シート」(表2)を配布した。このシートで設定した項目は、以下の4つである。

1-作品を通して、キャンパスの「いま・ここ」の価値について、表現できた(可視化できた)、2-各メンバーと積極的に連携・協力し班の学習活動に貢献できた(貢献度 \_\_\_\_\_%)、3-動画制作を通し、メディアの適及力について批判的思考ができるようになった、4「いま・ここ」の価値を多角的視点から再発見し、それが文化政策の基礎となることを理解できた。

以上の4項目のほか、気づいた点、反省点なども自由に記述してもらった。



表1 相互鑑賞シート

2018 文化政策キャンパス紹介動画鑑賞シート / 学生No.							名前
班No. 場所	テーマ明確度1~5	評価できる点	工夫を要する点	再発見したキャンパスの魅力	コメント	総合評価1~5	
19 キハルV	5	映像がすぐさま訴えかける 点 (音、色、光、香り) を多用している。		キハルの有った歴史を 知ることができた。 キハルの歴史を知ることができた。	キハルの魅力が 伝わってきた。	5	
9 キハルV	5	キハルの魅力を強く 知ることができた点。		キハルは正面から見ると建物 が綺麗で、奥には緑の森が 広がっている。	わかりやすかった。	4	
21 キハルV	5	Googleマップで調べた ポイントがわかりやすかった。		キハルが想像よりもキレイで 思いました。	おもしろいポイントが たくさんありました。	5	
11 体験館	5	資料館の魅力を伝えている 点。	体験館を伝えている 点に少し足りない点がある。	体験館に2つ以上の魅力を伝える ことができておもしろかった。	大変おもしろかったです。	5	
8 体験館	5	おもしろいポイントからとって 伝えていることがわかりやす かった。		図書館のEのコーナーは 資料が豊富にある。	面白いポイントが たくさんありました。 とてもおもしろ かったです。	5	

表2 到達度自己評価シート

2018 文化政策 到達度自己評価シート		2019/01/22 実施			
学生番号 _____		氏名 _____		/ 班 no. _____	
観点別到達目標	評 価 スケール				
	1(劣る)	2	3(ふつう)	4	5(優れている)
動画制作を通し、メディアの訴求力について建設的かつ批判的に思考できるようになった	不十分 または欠落	まだできず 不十分	できた	よくできた	大変よく できた
班のメンバーと積極的に連携し、協働学習活動に貢献できた (貢献度 _____ %)	不十分 または欠落	やや不十分 だった	貢献できた	よく貢献できた	大変よく 貢献できた
作品を通して、キャンパスの「いま・ここ」の価値について、表現できた (可視化できた)	不十分 または欠落	まだできず 不十分	できた	よくできた	大変よく できた
「いま・ここ」の価値を多角的視点から再発見し、それが文化政策の基礎となることを理解できた	不十分 または欠落	まだ理解は 不十分	理解した	よく理解した	大変よく 理解した

その他コメント (新たな学び、気づき、反省、展望など):

## II - 2. 制作された作品と場所の意味づけ

動画制作は、4～6人編成の35班に分かれて行なった。以下が、班分けの際にピックアップされた場所と班番号である。制作の途中で、若干の場所の変更を行なった班もあった。本稿では図2（写真）が小さすぎ、付箋が貼られた施設や場所の名称までは判別できないが、複数の班がエントリーしているところには、多くの付箋が貼られている。

ゆりの木ホール（学生サークル・部室棟）= 1, 2, 3

フォレスト（食堂）= 4, 5

こかげ（学生食堂）= 6, 7

図書館 = 8, 9, 10, 11, 12, 13

Aグラウンド = 14, 15, 16

チャペル = 17, 18, 19, 20, 21

8号館 = 22, 23（8号館5階）, 24（8号館5階）

6号館 = 25

体育館 = 26, 27

リラックスルーム = 28

プール = 29

シアター・ルーム = 30

1号館 = 31, 32

太刀川記念交流館 = 33

4号館 = 34, 35

紙幅の都合上、すべての作品の概要と学生による講評を紹介することは出来ないため、評価の高かった（5段階評価で5）5作品の概要を以下に紹介することにしたい。作品タイトルのあとのカッコは、作品の時間の長さ・尺である。

1班「ゆりの木ホール」（126秒）=部・サークル活動の拠点としての場所を、ダンスサークルの盛り上がりや男女が楽しく談笑するシーン、和室での茶会の実演動画も交えて紹介。それらに、「新しい自分に会える場所」、「毎日の生活の中心の場」、「落ち着いたひとときが過ごせる場所」「大切なひとに会える場所」「仲間と切磋琢磨できる場所」などのタイトルが付けられている。この作品は、自分たちの多様な課外活動を紹介し、場所と活動の意味づけとしてのタイトルがそれらに付けられており、キャンパスの動的な「いま・ここの価値」が表現され、それが十分に伝わってくる作品となっている。

7班「こかげ」（学生食堂）（59秒）=ランチタイムだけでなく空きコマの時間にもぎわう落ち着いた雰囲気のある食堂。正門からの行き方がカメラ目線で紹介されており、クリスマス時期の特別メニューの紹介や、イベント案内等の情報も盛りこまれ、「学生に寄り添うあたたかい居場所」、

「カレーライスやオムライスが人気」というグルメ情報も挿入されている。学食の紹介は多くの大学紹介フィルムにも多くみられるが、利用者の立場からのお薦めメニューの紹介は、周知したい情報の発信としても価値がある。

19班「チャペル」(110秒) = 毎年12月恒例のクリスマス礼拝のシーンから始まり、チャペル内部へと進む。礼拝のパイプオルガンの演奏をBGMに、チャペルの由来・説明(1963年1月25日、聖パウロの改心日に定礎式開催、正式名称は「立教学院聖パウロ礼拝堂」など)が字幕で入る。チャペルは新座キャンパスのシンボルだが、キリスト教系サークルにでも入らない限り、チャペルのデザインや由来について詳しく知る機会がない。作品は、その点をよくふまえ、解説も過不足なく入ったチャペルの紹介となっている。

25班「6号館2階・5階」(93秒) = 6号館は、2階にウッドデッキ(廊下)、ベンチのある建物。学生が画面に登場し「ここは近未来的だ」とコメントも。図書館も入っている建物であり、勉強に疲れたときに学生たちがくつろぐ2階のオープン・デッキは、在校生ならではの、「この価値」紹介の対象スポットである。また5階屋上も見晴らしのよい場所で、植物が植えてあり、ベンチもある。学生がどのようにスキマ時間を過ごしているかの紹介としても、興味深い。

32班「1号館」(102秒) = 正門を過ぎて広場の向こうに見える1号館。入ってすぐのラウンジ、書籍販売店、コンビニエンスストア・ファミリーマート、そして2階のデッキからの中庭の景色、大学が力を入れている復興支援室など、1号館の機能と魅力をリズムよく紹介した作品。大学の本部棟として威容を誇る1号館だが、大教室もあり学生の利用率も高い。作品には、その特徴が反映されており、仕上がりとして非常に良い。

以上、一部の作品の紹介とコメントを述べたが、いずれの作品も場所選び、紹介の工夫度という点で、自分たちのキャンパスへの興味と愛着を表現したものだと考えられる。

### Ⅲ. 動画制作による学びの考察 ― 鑑賞シートと自己評価シートの結果から

#### Ⅲ-1. 自己評価シートの結果から

配布・回収した自己評価シートは134枚(うち有効回答シートは133枚)だった。結果を質問項目ごとのパーセンテージで示すと、次のようになる。

1-作品を通して、キャンパスの「いま・ここ」の価値について、表現できた(可視化できた)か、との質問への回答は、まだ不十分=1.5%、できた=33.1%、よくできた=41.3%、大変よくできた=24%。これらから、「できた」との回答は98.4%となり、足もとの「いま・ここ」の価値について十分に再認識し、また表現できたと学生が実感していることが明らかになった。

2-各メンバーと積極的に連携・協力し班の学習活動に貢献できたか(貢献度 \_\_\_\_\_%)との質問への回答は、不十分=1.5%、やや不十分=16.5%、貢献できた=21.8%、よく貢献できた=31.5%、大変よく貢献できた=28.5%だった。クラスメンバーとの交流の機会を密にし、グループ活動がスムーズに進むよう配慮したものの、貢献が不十分だったとの回答が18%であり、24名の学生がグループワークに積極的に参加できなかったという自己評価結果は、授業運営に再考

を迫る結果だったと考える。

3-動画制作を通し、メディアの遡及力について批判的思考ができるようになったかという質問への回答は、まだ不十分=8.2%、できた=48.8%、よくできた=33.0%、大変よくできた=9.7%だった。他の項目に比べ、「大変よくできた」の割合が低いが、これは動画作品の鑑賞と鑑賞シートの記入に時間がかかり、あらためて作品の講評をじっくり行なう時間が少なかったことに原因がある。これも、教員側の授業運営上の反省点である。

4-「いま・ここ」の価値を多角的視点から再発見し、それが文化政策の基礎となることを理解できたかの質問への回答は、まだ理解が不十分=3%、理解した=39%、よく理解した=40.6%、大変よく理解した=17.2%だった。学生の96.8%が、文化政策の現場に必要な多角的視点を持ち「いま・この価値」を再発見することの重要性を、作業を通して理解できたと回答している。この結果から、机上の政策論や、足もとの生活空間をふまえない文化政策（それは往々にして外からの視点のみで進められる）ではなく、あくまでも自分たちにとっての「いま・ここ」を重視することが大切だと、学生たちが理解したと解釈することができる。これは、授業の狙いが成功したことを裏付ける結果だと考えてよい。

### III-2. 自由回答欄の記述から

回収シート134枚のうち84枚に、自由記述のコメントが記されてあった。その中から、本稿の主題に関わってくるコメントのいくつかを紹介しておこう。

#### ◎グループでの活動やコミュニケーションに関係するもの

- ・授業の各段階で常に必要となるのがコミュニケーション力だと分かった。その力が、政策案をシステム化する際にも重要だと理解した。
- ・特定のメンバーに動画作成の負担がかかってしまった。
- ・先輩後輩の別なく案を出し合い協力しながら積極的に作品制作ができた。
- ・映像の編集を集団で行なうのは難しい。
- ・チームでの動画作成を行ない、技術的にも成長することができた。
- ・個人ではなくグループによる制作ゆえに学ぶことが多いと感じた。
- ・グループワークは入学してから初めてだったが、新しい出会いもありよい機会となった。
- ・グループのメンバーとの話し合いで、新しい発想を得ることができ、とても有意義だった。
- ・よい作品を作るには、よいコミュニケーションが必要なのだと気がついた

#### ◎場所の新しい価値の発見に関係するもの

- ・自分たちが選んだ紹介スポットでさえ「こんな部屋があったのか」という新発見ばかりだった。
- ・選んだ場所が同じでも、その場所に寄せる思いは個々に異なっていて興味深い。
- ・今まで何気なく見ていた景色がすごく魅力的に見え、その場所の価値を見出せるようになった。

- ・今度はひとりでキャンパスをもう一度巡ってみたい。
- ・ふだん利用している施設が何か特別なものへと変化した気がする。
- ・いつものキャンパスで何気なく生活していると思っていたが動画制作はその場所の新たな魅力発見のきっかけになった。
- ・新座キャンパスもとても素晴らしく、クリスマスはロマンチックだなと思った。
- ・池袋と比較して劣っていると思っていたが、新座キャンパスのたくさんの魅力を発見できた。
- ・キャンパス内の建物、空間が自分や皆に対してもつ役割を考えることができた。
- ・チャペル内のステンドグラスやベル・タワーの美しさをあらためて知ることができた。
- ・他の班の作品を観て、自分のキャンパスに対する興味がわき、好奇心が刺激された。
- ・これからの学生生活のなかで、もっと魅力ある場所を探そうと思った。

### ◎表現に関するもの

- ・映像制作を通し、人や場所の魅力と価値を表現する方法が多様だと気づいた。
- ・自分たちの思いや意図をどのように表現すれば伝わるのか、工夫点がわかった。
- ・映像制作によって「いま・ここの価値」を可視化することができた。
- ・動画作成で新たな場所の魅力を発見でき、そこがお気に入りの場所になることが分かった。
- ・キャンパスの魅力の表現という視点で各作品を鑑賞すると気づくことがたくさんあった。
- ・動画で表現することで、いつもは気がつかないポイントにも目を向けることができた。
- ・色々な角度から写真や動画を撮ることで、今まで気づけなかった場所の良さに気がつけた。
- ・どの作品も、「そこに行ってみよう」と思わせる動画だった。
- ・人に魅力を紹介するには、まず自分自身がその魅力に気づくことが重要だと思った。
- ・キャンパスの魅力をいかに伝えるか考える過程がとても楽しかった。
- ・作品化することで、客観的視点が養われ、自分たちに足りない点にも気づくことができた。
- ・動画を通して観るだけで、いつもの場所が全く違う場所に思えた。

### ●制作の意図や授業のワークにおける狙いの不明点・反省点

- ・動画制作が文化政策にどのように関わるのか理解できなかった。
- ・ワーク(制作)の時間を授業内でとってほしかった。
- ・もっと説明に工夫を加え、制作に力を入れればよかった。
- ・自分が見えているもの、見せたいものを伝えることは難しかった。
- ・制作および鑑賞の時間が足りなかった。

以上の学生たちの言葉からは、いくつかのポイントを指摘することができる。それらを3点にまとめるならば、①プロジェクト・チームで作業にあたる時にはコミュニケーション力が大切だということ、②日常生活を見つめ直すには多角的視点が必要だということ、③相手に伝わる作品



を作るには、他者への想像力と制作上の工夫が必要だということ、である。「いま・ここの価値」を見出すグループワークによって、学生たちはこれらの学びを得ることができたと考えてよいだろう。

われわれはふだん、キャンパス“で”何かを学ぶのが、大学教育だと考えている。そのためにファカルティーがあり、研究室があり、教室がある。しかし本稿で述べてきた筆者の発想は、これとは少々異なる。キャンパス“を”通して何かを学ぶことができるのではないか。そうした発想があって、クラスで「いま・ここの価値」の探究を試みたわけである。これは、まちづくり系科目で近年動いている、「地域で学ぶ」から「地域から学ぶ」へのシフトにも対応することである。

「まち育て」を専門として掲げる弘前大学教育学部教授の北原啓司によれば、「まち学習」の基本は発見的方法だという。それを北原は次のように述べている。

演繹的に<すでに顕わになっている世界>から学び、<すでに存在する世界>を考察していくのではない。未来を想い、計画に反映すべく、<いまだ隠された世界>の発見を、<いまだ在らざる世界>の実現につなげていく手法なのではないだろうか。(北原2018:36)

また北原は、この発見的方法によって培われるのは「生きる力」(北原2018:37)だと述べている。自由に学生、生徒児童にまちを歩いてもらい、発見したことを通して、教員も一緒に学ぶ。それが北原の言う「まち学習」である(北原2018:38)。本稿で紹介した授業は、いわばこの「まち学習」の立教大学新座キャンパス編であり、「大学学習」なのである。

#### IV. 結論

冒頭で紹介した、学生の言葉をいま一度引用しておこう。「イケキャン(=「立教大学池袋キャンパス」の略称)に比べ、ザキャン(「立教大学新座キャンパス」の略称)は地味だし、インスタ映えするところが少ない」。この言葉を起点として、「いま・ここの価値」を掘り起こすための学びを試みてきた。理論的な背景として、生活空間や場所の意味と価値の問い直し、人が集まり形成される「コミュニティ」についての再考などを経て、授業で実施したキャンパス紹介動画制作というワークについて、その学びとしての意義を考察した。

先に述べたように、キャンパスや学びの空間全体の価値や魅力を味わう機会は少ない。だからこそ、そのような場所に分け入ることで、学生や教職員の双方も足もとに対する視点や見方が豊かになるのではないか。そうした機会も余裕もこれまでになかったならば、やってみる。そして授業としてやってみた。結果、学生も授業担当教員の私も、学びの場としての大学の「いま・ここの価値」をあらためて発見することが出来た。授業デザインとしてはまだまだ不十分だが、今後もこれを洗練させながら「大学学習」を掘り下げていきたいと考えている。オープンキャンパス、新入生のガイダンスなどの機会に、本稿で紹介した学生たちの作品を披露し、新座キャン

バスでの学びが意義深いものであることを多くの人に知らせることができ、そこでまたフィードバックやコメントをもらうことができれば、このアクティブ・ラーニングの意味は、より大きくなると考える。

#### 注

- (1) 「コミュニティと文化／文化政策」の授業デザインについては、佐藤2016で述べている。そこでは、「いま・ここの価値」を掘り起こすワークショップを取り入れ、アクティブ・ラーニング型の授業の試みの概要を紹介している。また、「いま・ここの価値」を掘り起こす作業は、足もとの時間と空間をそれとして受けとめ直すことを促すものである。まずは現場がどのような状態にあるのか、自分にとってその場所はどのような意味があるのか。こうした点をグループで探っていくのが、授業で行なったワークショップである。実践の現場は異なるが、空閑は、「メタ・ファシリテーション」というアプローチで、コミュニティにおける課題を掴み、解決していくことの重要性を論じている。空閑は、「なぜ」と他者に問うことが、問う者と答える者にとって都合の良い虚構の共有を生み、現状認識を歪めることになりかねないと指摘する。そして事実焦点を当てた問いかけが「いま・ここ」に立脚した気づきを当事者にもたらす可能性を有していると指摘する（空閑2017）。これは、「いま・ここ」の実存的な価値を再考する際にも実践できる手法のひとつだと考えられる。
- (2) 足立は、元気な地方都市に共通する特徴として、そこには個性的な中心市街地があると指摘する。この「まちの個性」は長い時間をかけて開花するものであり、それを支える価値が地域に対する「センチメンタル価値（愛着価値）」であり、これを重視したまちづくりの可能性を探っている（足立2009:v）。
- (3) グローバル世界におけるコミュニティについて考察した社会学者ジグムント・バウマンは、コミュニティとは人間社会の幻影であり、「残念ながら目下手元にはないが、わたしたちがそこに住みたいと心から願い、また取り戻すことを望むような世界を表わしている」（バウマン2001=2017:10）と述べる。バウマンは、安心、安全であることがコミュニティの成立条件であるとしながら、ポスト近代の世界では、それらを得ようとすれば欲求・欲望のままふるまおうとする個人の自由を犠牲にせざるをえないと述べ、「安全と自由の戦場」として人間社会を分析する。バウマンのコミュニティ論を、コミュニティとしての教室やキャンパスを考察する際に参照するのは、少々位相が異なるかもしれない。しかしバウマンの考察を受け、主体的な学びを是とするアクティブ・ラーニングの基調のなかで問われなければならない論点がある。それは、「主体的であるとはどのような事態なのか」という点であり、「主体的学びで培った主体が、小さなコミュニティ（＝教室やキャンパス）を離れて、別のコミュニティ（＝地域社会、企業組織、日本社会、グローバルな社会など）でその学びの成果を発揮しようとする際に、やはり安全と個人の自由の折り合いという課題に直面する」という点である。これは、ジョン・デューイが考察した「学校と社会」の関わりという重要な教育論の課題とも関わってくるが、これについては別の機会に論じたい。
- (4) 立教大学における学びの空間環境整備については、同大学のWebサイトでも紹介がある。「さまざまな学習支援」  
<http://www.rikkyo.ac.jp/campuslife/support/learning/others.html> (2019年1月20日)

## 参考文献

- エドワード・レルフ (1999)『場所の現象学 没場所性を越えて』高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳 (原著 1975、邦訳 1991)、筑摩書房 (ちくま学芸文庫)。
- R. M. マッキーヴァー (2011)『コミュニティ』中久郎・松本通晴観監訳 (原著 1917) ミネルヴァ書房。
- ジグムント・バウマン (2017)『コミュニティ 安全と自由の戦場』奥井智之訳 (原著 2001、邦訳 2008) 筑摩書房 (ちくま学芸文庫)。
- 足立基浩 (2009)『まちづくりの個性と価値 センチメンタル価値とオプション価値』日本経済評論社。
- 美馬のゆり・山内祐平 (2005)『「未来の学び」をデザインする 空間・活動・共同体』東京大学出版会。
- 岡村製作所オフィス研究所・前田明洋 (2013)『ナレッジ・コモンズ グローバル人材を育むキャンパス空間』日経BP。
- 池田輝政・松本浩司編 (2016)『アクティブ・ラーニングを創るまなびのコミュニティ 大学教育を変える教育サロンの挑戦』ナカニシヤ出版。
- 坂本旬 (2014)『メディア情報教育学』法政大学出版局。
- アンドリュー・バーン (2017)『参加型文化の時代におけるメディア・リテラシー 言葉・映像・文化の学習』奥泉香編訳、くろしお出版。
- 堀公俊 (2018)『ファシリテーション入門 <第2版>』日本経済新聞出版社。
- 空閑厚樹 (2017)「持続可能なコミュニティと「メタ・ファシリテーション—「なせ質問」から考える創造的なコミュニケーションのあり方—」『立教大学コミュニティ福祉研究所紀要』第5号、立教大学コミュニティ福祉研究所、pp.105-118。
- 北原啓司 (2018)『「空間」を「場所」に変えるまち育て—まちの創造的編集とは—』萌文社。
- 佐藤壮広 (2016)「大学教育におけるファシリテーション(3) —アウトプット(作品化)の事例を中心に」『立教大学コミュニティ福祉学部紀要』第18号、立教大学コミュニティ福祉学部、pp.75-91。
- 佐藤壮広 (2018)「コミュニティを活性化する学びのデザイン」未来のまなびフェス (主催:河合塾、2018年8月9・10日、於武蔵野大学有明キャンパス)、ポスターセッション報告資料。